

新しい時代へ 人間性の回復と質実剛健

木村 玄次郎

2008 年は、アメリカ経済の破綻に端を発した世界恐慌の始まりである。オバマ次期大統領が「Yes, We can」や「Change」をキャッチフレーズにアメリカの立て直しに着手することになるが、前途は多難である。アメリカは、余りにも自国の利益を優先し、自国の価値を高める評価基準を作成し、その基準をグローバル化の名の下に世界に押しつけてきた。その評価基準が、実態とはかけ離れたものであったために、今回の悲劇が起きたのではないか。アメリカの信用に大きな傷が付き、世界からの信頼を失った。今後も世界のリーダーたり得るかは厳しい状況と考えられる。オバマ新大統領の登場は、「アメリカは今後、低姿勢に変化しますよ」とのメッセージのようにも読み取れる。

医学の世界でも例えば N Engl J Med に掲載されるような大規模臨床研究を大きく評価することによってアメリカの医学レベルを高く見せると同時に権力をアメリカに集中させるような仕組みを作っているように思える。企業の格付けと impact factor などの評価基準には似た背景が存在する。今年、N Engl J Med に発表された大規模研究を見ると ONTARGET や iPRESERVE など有意差を出し得ていないものが多く、このやり方に限界が見え始めた。大規模研究でなければ明らかにし得ない領域はむしろ少なく、もっと患者背景を均質にした小規模な研究でこそ臨床的有用性を証明し得る治療法や概念が多いと考えられる。大規模であるがために雑多な背景の患者が混在し、逆に論点を明確にし得ない状況が続いている。臨床の実態に即した均質な集団を対象とした詳細な研究が重要になると考えられる。巨額の資金にものを言わせる研究から、もっと病態に密着した地道な研究が問われている。

高度成長期には、確かに短期的な業績を評価し、更なる進歩を目指す手法が科学や社会を進歩・発展させる上で重要であったことは理解できる。しかし、今後は、より長期的視野に立った評価が問われている。このように考えると日本が得意とするヒトを大切にシステムは意外と力を発揮する可能性が高い。フリーターや派遣社員としてヒトを使い捨てるシステムは社会として容認できない。もう少し、ヒトがあつてこそその社会であることを理解する必要がある。国の財産はヒトであり、人財を育成することは大学の最大の使命である。努力

や忍耐が正当に評価され報われる社会を形成して行くことこそ、今後の日本そして世界の健全な発展にとって重要な課題と考える。努力や忍耐が逆に疎んじられ、楽して儲けるマネーゲーム的なことが賞賛・尊敬される時代は、このアメリカ経済の崩壊で終わりにしてもらいたい。

ヒトやモノを使い捨てる時代から、使えば使い込むほど、古くなれば古くなるほど歴史と共に輝きを増す人間味に溢れる社会へと転換する必要がある。ヨーロッパやアジア、それに我が国には、それらの価値観を見出す思想や文化が存在すると期待したい。ガンジーの名言として知られる「7つの社会的罪」を思い出すと現在にも見事に当てはまる。

- | | |
|------------|-----------------------------|
| 1. 理念なき政治 | Politics without Principles |
| 2. 労働なき富 | Wealth without Work |
| 3. 良心なき快楽 | Pleasure without Conscience |
| 4. 人格なき学識 | Knowledge without Character |
| 5. 道徳なき商業 | Commerce without Morality |
| 6. 人間性なき科学 | Science without Humanity |
| 7. 献身なき祈り | Worship without Sacrifice |